

基調講演

「“長寿社会”初代を生きる役割と覚悟」

樋口 恵子

高齢社会NGO連携協議会 代表

高齢社会をよくする女性の会 理事長

——無理はよいけれども無茶は駄目

堀田先生の後をついて、一緒に高連協の代表をさせていただいております樋口恵子でございます。今回は基調講演のお当番になっていきますので、少し話をさせていただきます。普通は私は立って話すほうがかえって楽なのですが、主催者が気を利かせて椅子をご用意くださいましたので、この言い訳からまず始めさせていただきます。

私はこの4月の連休、胸腹部大動脈瘤炎症ということで、4時間にわたって心臓を止めての大々手術を行ないました。術中に死ぬ可能性も若干はあり、神経にさわって右足片麻痺になる可能性も20%ぐらいあったらしいのですが、お蔭様でしぶとく生き残り、今のところ障害もない。しかし、私は人工血管を3つも入れ換えた状況です。そのときはちょうど誕生日直前で76歳でした。「人生100年の提唱者をもって自任する私が、76年じゃ、ちいと足りないな。みっともないな」。麻酔の闇の中に落ち込むときに最後に思った思いは、それです。

この間、改定になった平均寿命は、女子は86.05と86の大台を超えました。男子もまた79.29と0.1年延びました。これは人口学の人もそうだろうとおっしゃっていますが、男性の自殺者が減れば、80歳の台に到達するのも間もないことと思われます。そして人生100年。

今度、病気になって2つ思いました。今日も暑い中、ここまで来るのは大変だけれども、エイヤと無理していらっしゃったでしょう。定年後の高齢者は、少し無理をしないと何事もできないのです。高齢者は自分に気合いをかけて無理をすべきだと私は思っています。ただし、無茶はいけません。無理はよい。無茶は駄目。これが感じたことです。私は後期高齢者にしてはあるまじき無茶を、この1月から3カ月ぐらいやっていました。北へ行って飛行機で帰ってきたかと思うと、その足でそのまま羽田から九州へ行き、往復して帰って東京の2、3日の用を済ますと、また週末には九州へ行く。これはやはり年齢を思えば無茶でした。



それから私は、健康は大事と思っていますが、健康に捕らわれて縛られてしまっているような人に対しては、はなはだ批判的な目を持っていました。これは今でもそうと思っています。ただし、そういう大義名分の下、本来だったらこの年齢の人が配慮すべき健康への配慮をしていませんでした。食べたい放題に食べて、太りたい放題に太っていました。人生100年の天寿を全うしようと思ったら、やはり運動にも気をつけなければいけないでしょう。私は本当に運動が嫌いなのです。今回も、心臓の医者にバッチリ言われました。「このような病気を克服して長生きをする王道はありません。道は2つだけです。きちんとした知識に基づいた食生活と、少し無理をするくらいの適正な運動」。

人生100年時代といわれる時代を健康に生きようと思ったら、食べたい放題、飲みたい放題をやっている健康は保てない。それから運動も適正に自らに課していかなければ駄目だ。私は喜寿にして、はじめて悔い改めることを決意したのであります。皆様と末永くお付き合いしたいと思いますが、10年経つと、私はちょうど女の平均寿命を超えます。この日、10年前に決意表明をしたときと同じ体重を樋口は保っていると皆様に言われたいので、どうぞ皆様もフィットネスをして長生きをしていただきたい。

——人生100年丸に乗る覚悟

さて、大変な時代でございます。

今、大変というのは、いろいろな意味で大変です。最も端的に目に見える大変は、あえていえば、麻生か鳩山かということであろうと思います。これは約1カ月後には結論が出るでしょう。与党も努力をしてきたことがあると思うし、にもかかわらず、今の社会保障の衰退はやはり与党が招いてきたことだと思うし、どちらが勝つにせよ、今ある社会保障の枠組みや予算編成の発想や、これからの世の中のあり方。

社会保障といっても、次の世代が生まれて保険料を払ってくれなければ、100年まで生きると社会保障費に響いてきます。それと同時に、では若いところだけに力を入れればいいのかというと、高齢者が豊かに生きていかなかったらどうなるか。

終わりよければすべてよしという言葉があるように、若い人たちも利口だから、今、20歳の自分たちは、30歳の私たちは、子どもを生んでくれとおだてられているけれども、そのなれの果てが70、80のじいさん、ばあさんだということをみんな知っています。医療費削減のため、じいさん、ばあさんはあまり医者にかかってもらっては困りますと言われたり、介護費用節減のため生活援助はできるだけ削減しようではありませんかという政策が出されているのを知っています。これでは安心して老後を迎えられない。若い人たちは敏感です。「この国は一生、安心して生きられない社会だ」。

また、安心できないおじいさん、おばあさんが多いと、自分の手元にせめて肉親の子どもをとどめておこうと思います。若い者が安心して家を出て、新しき伴侶と飛びついて一緒になって楽しい生活をするような結婚をさせてこなかった。「あんたはこの家の1人息子なのだから」「あんたは婿を取らなきゃ、結婚は許しませんから」とやってきて、今、日本の50歳以下の独身者は世界一の多さです。統計上は北欧も独身者が多いです。しかし、日本

の独身は正真正銘の独身なのです。北欧やフランスの独身は、とか何とか言いながら一緒になってしまって子どもを生んでいます。法律的届け出を出していないというだけの独身です。日本は、結婚しなければ子が生まれない。逆にいうと、子ができてしまったからしょうがないと結婚する。東京下町の医師会の調査では、その地域の初産の何と4割が、できちゃった結婚だそうです。

どうしてそういう社会にした。考えてみると、戦後60年ぐらいがいちばん殺伐した時代をつくってしまったのではないか。今40代ぐらいの人が結婚するときは、本当に体力に優れた人でなければ、お見合いもデートもできないといわれました。今、30前後の働き盛りがいちばん使われています。相手になる女性も均等法世代です。セブンイレブンといわれました。つまり7時前にホテルで朝食を取りながらデートをし、そして10時に成田に着いた男が女の会社へ電話をかけて、11時半に何々ホテルのロビーで。これのやれる人でないと、なかなか結婚できない。そんな日本をどうしてつくってしまったか。今こそ、ワークライフバランスと同時に、若い人に恋愛できる時間と家庭生活のゆとりを持ってもらい、週に3回ぐらいは5時に帰れる日本社会。おそらくそれは絶望的だと思いますが、そういう社会をつくらないと、根本的に日本は変わらないと思っています。

そのような反省を込めて、私たちは人生100年という長寿を意識して、これからの残る人生を開いていく初代の高齢者です。中年は初代の中年です。

幸か不幸か、選択の時代といわれながら、私どもは選ぶことのできないものがたくさんあります。配偶者も選べる。仕事もそれなりに選んできた。家も選んだ。しかし、いつの時代のどこに生まれるかだけは選べないのです。私どもは今、人生100年丸——あるいは人生100年ニッポン丸でもいいでしょう——の初代というべき時代に生まれ合わせたことを心から感謝したいと思っています。

ただし、初代には覚悟がいります。初代というのは、先祖がモデルを残していってくれませんが。われわれの親でも結構長生きをした人はいますが、この人たちは予期せぬ長生きをして、茫洋たる中で世の行ないが終わったところです。私どもは幸いにして、人生半ばにして、同じ日本という国土を踏みながら全く違う世界に向かって進行しつつある人生100年丸という船に乗り合わせています。行く先は、これは少し先になるかもしれませんが、地球まるごと長寿社会です。光栄にして私どもは世界の中でも先頭を切って人生100年丸の乗組員になっている運命共同体です。ここにいる人々の中でも、あいつとだけは同じ船に乗りたくないという人もいます。私も世の中に4、5人います。でも、しょうがないです。

初代に生まれた光栄。人間あるいはほかの生物も、生命として生まれて必ず死ぬのですが、では生命の喜びとは基本的に何か。あえていえば快樂です。生命の快樂とは長き命を楽しむことです。その意味でいって、私たちは、史上最高の人間として長寿という快樂を楽しむことを普遍的に得た最初の世代です。昔から100まで生きた人はいるからつい錯覚してしまいがちですが、かくのごとく人類が普遍的に長寿を獲得した歴史は、人口学者に聞いてみなければ正確な年数は分からないものの、たかだか半世紀です。人類は感染症を早く克服したから、本当は20世紀の半ばぐらいには長寿を獲得できる地域が増えていたはずなのに、人間はば

かだから、第一次世界大戦に懲りず、第二次世界大戦などという、千万単位の死者が地球上に生じる戦争をしました。そうやって平均寿命を縮めてしまったのです。

只今の平均寿命は、日本は世界一です。正確にいうと、女は24年間1位。男は鼻の差の4位です。これは自殺の多さなど、いろいろ入っていると思います。日本のような気候風土に恵まれた社会においては、しかも豊かな社会においては、男女とも鼻の差で世界一でちっともおかしくないと思っています。これから男性のさまざまな意味での奮起を望みたいところ です。

第二次大戦の死者のほとんどが集中した昭和20年における日本人の平均寿命は、男子23.9、女子37.5でした。その短さが、戦後の日本人の命の出発点です。どんなにみんな生きたかったことか。どんなに日常の生活の中で、もっと普通の命を保ちたかったことか。そう いった中で、無残なほどの平均寿命の減退に至ります。長寿の最大の敵は何か。理不尽な死 が満ち溢れる戦争です。次が貧困。つまり飢餓や悪質な疾病の増大につながる貧困です。

だから長寿社会は、基本的に胸を張っていいのです。確かに病気になると、お金がかかり ます。私も今回の手術料を見て目を回してしまいました。娘は医者ですが、治ってから、ニ ヤニヤ笑って私に言うのです。「お母ちゃんは後期高齢者医療制度の悪口をあんまり言うか ら、ばちが当たったんだよ」。私は今でもこの悪口を引っ込める気は全くありませんが、後 期高齢者医療制度になったおかげでした。

私は元々、文芸美術国民健康保険組合に入っていて、保険料は年間20万円そこそこだっ たのです。それが今度は現役なみに働いているということで、国保は最高額50万円です。 20万円が急に50万円になったのだから怒ります。しかし、私の今回の手術料は、これから も働き続け生き続け、50万円の保険料を10年近く払わなければ賄えないような額を、皆さ んの保険料で払ってもらえました。やはり日本はいいところもあると、身にしみて思いまし た。もちろん私は高額の一時的な費用は3割払うので、結構大変ではあるけれども、基本的 に国民皆保険の医療保険ができていて日本の制度は、断固として死守しなければいけない。 そういったことを、実はわれわれがつくってきたのです。われわれがつくって、われわれが 保険料を払ってきたのです。少し自信を持とうではありませんか。

言いたかったことは、つまり世界大戦で、むしろ先進国を中心に平均寿命を引き下げまし た。おかげで世界の国々が長寿を獲得して、平均寿命が70歳以上といわれる国が増えてき たのが西暦1970年頃です。80歳に届いて人生80年時代といわれたのが、日本も含めて西暦 1980年頃です。そしてこの頃に至って、特に長寿の日本の女性は86、四捨五入すれば90だ から、正確に言えば人生90年 時代がいちばん妥当だと思います。ただ、少し大きくつく っておいたほうがいいだろうというわけで、人生100年社会と私は提唱し続けたのです。た だ、女は乗ってくるのですが、男はあまり乗らないのです。やはりこれは平均寿命7歳の差 という事もあると思います。女の方は「人生100年社会いいですね」とすぐおっしゃるの ですが、男の方は「そこまで俺、生きるはずないよな」。100年生きる男の方もいくらでも います。

私は人生100年という看板は引っ込める気はありませんが、今日の話の後半のサブタイト

ルは、こう決めました。長寿文明の創造。人生100年社会のシステムとありますが、100年とはどういうことかという、昔からは考えられないほど長寿になったという意味なら男性も賛成してくれるでしょう。



そして長寿の文明。文化と文明の違いを話すには、私は浅学非才です。長寿文化でもいいのですが、あえて文明（civilization）を使います。意識的にシステムの構築していこうという意味でいうと、文化というよりは文明。ある環境において、その時代を生きる人の生き方の総和を文化というとするならば、文明は、

その時代を生きる人々の多数派工作です。その多数派で意志の力をもって長寿にふさわしい社会のシステムを形成していこうという、より意志的な、よりシステムの、よりテクノロジーっぽいもの。テクノロジーは科学・技術の面だけではなく、より社会工学的に意志の力をもって創造するという意味で、あえて長寿文化といわず長寿文明といわせていただきます。

ご先祖は生きなかった。人生50年か60年で死んでしまったのです。少なくとも多数派がこれほど生きるようになったのは、人類何万年の歴史の中で今が初めてです。それも、OECDに所属しているような先進国の上に起きていることです。地球上70億の人口のうち、平均寿命が40代の国がアフリカに10地域ほどあることを、私たちは地球市民として忘れてはなりません。しかし、地球の未来の理想は平均寿命40代の時代に戻るのかと云ったら、絶対そうではない。1人1人が個性豊かに生き、物的にも精神的にも生きる幸せを分かち合っ、そして天寿を全うする世界が少しずつ広がり、最後に地球上全域に広がるのが人類の理想です。

これからは、アジアの国々が日本に負けないスピードでこの動きを加速していくことでしょう。だとしたら、今、最先端をいく日本は長寿文明の創造のために何をすべきか。お蔭様で私たちは、戦争のために外国人の血、同胞の血を流さないことを国際社会に誓った国の国民です。おかげでこのような世界一の長寿を獲得しました。血を流さなくてすむのだから、汗ぐらい流しましょう。ちょうど今、夏です。汗ぐらい流しましょう。夏の労働の汗ばかりではなく、これは困った、進退きわまった、どうしたらいいだろうという心の冷や汗もかきながら、試行錯誤は堂々としようではありませんか。ご先祖のモデルがないのだから。私たちが長寿文明の初代のつくり手です。長寿文明の伝統の初代の開き手です。堂々と試行錯誤をしましょう。当たり前のことです。

——長寿文明を創造する責務

試行錯誤をしながら、残る時間、初代として考えておきたいことを時間の許す限り申し上げます。

地球まるごと長寿文明を開いていく初代として、まず最初に心がけなければならないことは何か。高連協も少し前から手がけていることですが、地球まるごと長寿社会が迎えられるように、次の世代に生き延びられる環境、持続可能な環境にすることが、基本的に大事なことでと思っています。

われらは戦後の貧しさを知りながら豊かさも満喫し、今、長寿を享受する立場にいる。そしてこのような長寿を次の世代にもつないでいきたい。だとしたら、われわれの世代で地球の資源を使いっぱなしにしないで、改めるべきは改め、心がけるべきことは心がけ、聖書にはこういう言葉があるそうですが、私たちは絶対に「わが亡きあとに洪水よ来たれ」と思わない。洪水が来るならば、わが世代でせき止める役目を果たそう。

先ほど、男のプライドでホワイトカラーの偉い方が地域に参加できないというお話がありましたが、このへんについては女としては言いたいことがいっぱいあるのだ（笑）。元政府高官や元大企業の管理職で、「するべきかなあ。でも、何々会社の取締役の俺は行けない」とプライドが邪魔をして参加できない人がいます。本当に嫌なら参加しなくていい。人は勝手に不幸を選択する権利もあるのです。しかし、本当はプライドが邪魔しているのではないと私は思っています。プライドがないのです。ないから、「元政府高官」にしがみついている。それしかないからです。本当にプライドがあったら、「あの人が」ということもできるはずなのです。

これは自慢ではないけれども、私は政府高官よりは個としての自信、プライドがあると思っています。今、思えば6年前、私も蛮勇を奮ったものです。強大なあの知事に対抗して、東京都知事選に出たのです。ここにいらっしゃる多くの方から応援していただきました。ああいったことをするから、暇になります。私はちょうど70歳。都知事選立候補があらゆる意味ですべてを失う。自由業なので講演や原稿の仕事はぼつぼつありましたが、テレビなど多くのメディアは、それをきっかけにかなりなくなります。はっきりいって時間ができました。私は何をしたか。

私は大学を卒業してすぐに結婚してしまって、子どもを生んでから再就職をして、それからぼちぼちやり始めた就職の苦労人です。こういう生き方をしてきた人は、高校の英語教育がわりにしっかりしていたおかげで読み書きぐらいは不自由しないけれども、オーラルなコミュニケーションは苦手です。だから私は英語の苦労人です。生涯、英語を使わないで逃げる気でいたのです。ところが、こんなに英語時代になるとは私も思いませんでした。こちらでも60を過ぎると、いろいろな所を代表して国際会議に行く機会も増えます。そうになると、英語でしゃべらなければならないこともできるわけです。四苦八苦です。

私は暇になったときに何をしたかということ、入学金、大枚20数万円かけてベルリッツに入学しました。1年も経つと元の木阿弥で忙しくなったから行かなくなったのですが、1年行ったベルリッツのおかげで、そのあとの国際会議はわりに上手い（笑）。知っている人は「樋口さんが英語学校へ？」と言うのですが、「はい。私は樋口恵子としての誇りがございますし、誇りがあれば、わが英語の醜態をしっかりと等身大に見ることができます。従いまして、なけなしの預金をはたいて行ったのです」。オーストラリアから来た28歳のお兄ち

やんに「ほら、もう一度。イントネーションはトントントン、はい」とやられて、とても面白かったのです。

プライドがあると思っているのは、それは個としてのプライドがないからです。何の何兵衛と名刺の両面に書いた固有名詞をもって、いろいろなことにチャレンジしていただきたいと思っています。

アメリカのニーバーが、名文句を残しています。キリスト者なので神に祈ります。「神よ、われに3つの力を与えたまえ。1つは、変えるものを変えるべき勇気 (courage) という力」。2番目は、しかし世の中は変えられないものがある。端的に言えば、どんなに長生きになろうとも、われわれは死ぬ。これはどう転んでも、変えられるものではありません。ニーバーは言います。「変えることのできないものを受け入れる冷静さ (serenity) を持とうではないか」。そして3番目。これがまた味のあるセリフです。「前の変えるべきものと、後の変えることのできないものを、取り違えない知恵 (wisdom) を持とうではないか」。おっしゃる通りです。

ニーバーの言うことに心から頭を下げて「そうだ、そうだ」と言いながら、変えるべきものを変える勇気までなかなか人間は持てない。せめて変わっている現実ぐらい直視する勇気を持とうではないか。ところが、変わっている現実を直視することの嫌いな人たちが意外に多いのです。特に高齢社会において。

高連協の男女の代表のうち、今日は女性の代表が基調講演をさせていただくので、男の方には憎まれ口には聞こえると思いますが、あえて言わせていただきます。人生100年社会には男女平等がよく似合うのです。男女共同参画がよく似合うのです。嫌な人は早死にさせていただいたほうが幸せです。私は男女共同参画について昔からいろいろと言ってきましたが、これを大多数の男たちは単なる憎まれ口と思ったようです。だから私は人生100年とは言わず、長寿社会における文明の基礎だと言っても、聞き耳を持たない男が多かったのです。

女が何か言うと感情的だと男は言う。嘘つけ。女に何か言われて感情的になるのは男です。テレビ番組で、シンポジウムで、私は穏やかに言っているのです。「男の方も、ご自分のことぐらいご自分でできるように」「いきなり家事までやれとは申しません。ご自分の身の回りのことや、奥様がいないときにご自分のお食事ができること。これは家事ではございません。自分のことだから“自事”です。どうせ“ジジ” (爺) なのだから、自事ぐらいやったらどうだ」。そう言うと、聞いている男性はカッと感情的になるのです。私もまだまだ逆風の吹く中を、男女平等、男女共同参画を説いてきました。多勢に無勢、女は私1人、あとは男の先生方という中で、ほんとうにボコンボコンに叩かれて、向こうは感情的になっているから、こちらの感情を刺激するようなことを言うわけです。でも、女である私は冷静に、席を立ったことなど一度もありません。どんな悪魔にも耐え、言うべきことはやんわりと、ときに激しく言い返し。

「家庭科の男女共修をすすめる会」も、私は発起人の1人でした。その頃の各国の世論調査があります。18になるまでに、子どもに身につけさせたい能力は何か。男の子と女の子に分けて、その年頃の子を持つ両親に調査をしています。今でも印象に残っているのは、「何

かのとき家族の食事がつくれるようにする」が、スウェーデンにおいては、ほとんど100%の親が男の子にも女の子にも丸をつけていました。アメリカで7割ぐらい。女の子には8割ぐらい、男の子には2割そこそこと、男女の開きが最も大きかったのが日本です。これは25年前の話です。今、その子どもが高齢者の介護者になりつつあります。そして時代は大きく変わりつつあります。

介護保険の議論は20年ぐらい前から始まっています。法律は1997年で、論議が始まったのは1994年頃です。その少し前、日本の家族の介護者の性比は女性が9割でした。そのうち最も高い続柄は5割以上が嫁でした。つまり息子の配偶者でした。次が妻でした。その論議の頃から、ほぼ30年経ちます。今や主たる介護者の性比は28%が男性です。平均寿命の関係からいっても、主たる家族介護者の性比が、男性と女性が五分五分になる日はないと思っていますが、この間まで1割だったのです。今、3割に近くなっているのです。これはほとんど地殻変動といってもいいほどの大きな変化です。

どこで増えているか。まず、夫で増えています。昔に比べて、お2人様が増えます。大家族でいると、妻が倒れても嫁がみるということがあるのかもしれませんが、老夫婦でいるうち、どちらかが倒れれば、どちらかが介護者になるというわけで、妻が倒れて夫が介護者になる。これがグッと増えています。

2番目。われわれの世代は、今50になろうとする子どもたちを、男の子と女の子と育て分けをしてきました。女の子は、いつでもお嫁に行けるように、家族の食事ぐらいはできるように育ててきました。ところが、男の子だったら「あなた、それよりはお勉強」とやって、いい大学を出て、いい就職先を見つければ、いいお嫁さんは降るほど来ると言って育てているから、何もできないまま。しかし、世の中そうはいかず。この年頃からは、子どもが2人っ子時代に入っています。つまり40代ぐらいの中で、いちばん多い家族関係の続柄は長男か長女、昔でいえば跡取り同士が出会う。しかし長男の親が、うちにもらい切りにできる方、うちの位牌を守ってくださる方などと言うと、だんだん来なくなってしまったのです。

どこの国でもシングルは多い。日本の特徴は、若い世代がシングルである。この若い世代の大シングル社会が、日本の超高齢社会の基本的な1つの要因であるわけです。しかし、大シングル社会で仲間は結構いるのです。きちんとした会社の管理職になって、お嫁さんがいないことを除けば、お嫁さんと離婚したことを除けば、いまだに母親にとって唯一の誇りといわれるような息子もいるのです。そういう息子が、それでも支店長になり、80を過ぎた母親はけなげに息子の食事をつくり続ける。しかし、ある日、倒れる日がやってくる。ここでニーバーのいう、「避けることのできないものを受け入れる冷静さ」があるかないかが問われているのですが、この息子に冷静さはないのです。昨日まで食事の用意をしてもらっていたのが、今日から自分で食事をつくり、自分で会社に行き、おふくろの世話までしなければならぬ。パニックになるのが当たり前です。おふくろにも罪があります。自分のことも自分でさせないで育ててきた罪の一端はありますが、広くいえば男性企業社会がそれを要求して、そのような性別役割分業を温存してきたのです。親子とも被害者です。

結果として、介護保険を受けて2006年につくられた高齢者虐待防止法の2度にわたる調査

を見ても、1万6000人という高齢者虐待の中で、最大の被害者は80代以上の女性です。最大の加害者は息子という続柄です。1回目の調査のとき、私は非常に意外でした。息子はあるだろうとは思っていましたが、いちばん多いのは妻だろうと思っていたのです。介護をしている妻が多いからです。

介護保険前には、恐いような面白いような話を聞きました。最初の話は保健所関係の方から聞いた実話です。ゴールドプランが始まって保健所の人がようやく家庭の中に入れるようになった頃、立派な家のおじいさんのおむつ替えのときに褥瘡（じょくそう）の手当をしようと思って見たら、背中やお尻に青あざがいっぱいある。保健師さんはびっくりして「これは」と言ったら、それまでそばに慎ましく控えていた老妻が薄い笑いを浮かべて「ええ、ちょっとね」と言って立ち去ったそうです。そうしたら、寝ていらっしゃる被害者のおじいさんのほうが取りなし顔で、「昔、わしがさんざん悪さしたものだから。まあ騒がずにいてほしい」と言ったそうです。

2番目の話は、愛人の家に居続けた夫が倒れた。そうすると、その愛人は荷札をつけて宅急便で送り返すわけです。正妻は、ろくに生活費も送ってもらえなかったのに、仕立物などをして4人の子どもを育て上げた良妻賢母です。腕を見込まれて、老眼鏡をかけていまだに仕立物をしています。そこへ倒れた夫の一族郎党が、心配でやって来ます。この夫は酒飲まずの色好みで、甘いものが大好き。一族が菓子折りを持って行くと、良妻はいそいそと大きな菓子鉢に入れて枕元にそのお菓子を山盛りにして、そのうちの1つを「はい、おじいさん」と言って、利くほうの手に握らせてやるのだそうです。おじいさんは喜んでパクパクと食べる。1つ食べ終わったところで長居は無用と一族郎党が帰っていくと、おじいさんはもう1つ食べたい。完全な片麻痺です。利くほうの手を伸ばそうとすると、ふすま越しに仕立物の二尺差しがついと伸びて、菓子鉢を1尺ほどスッと向こうへ動かすのだそうです。おじいさんは利くほうの肘を使って、結構な時間をかけてやっと菓子鉢に手が届くとなると、また二尺差しが伸びる。これは何の虐待でしょう。

こういう話を聞いていたから、さぞや積年の恨みのこもった妻からの虐待が多いのではないかと思ったら、妻は低いのです。この理由の分析は専門家がしていると思いますが、私の分析によると、うんと高齢化してしまっているのです。老老介護、認認介護で、配偶者が介護しているところが本当に社会的サポートが必要な状態になって、妻も90前後になってしまうと、恨みつらみを忘れたわけではないけれども、いびっている気力がないのです。そのように私は解釈しています。

その中から嫁という続柄が減っているのは、嫁が見るのは嫌だと思っているのも若干あるかもしれませんが、そうではなくて、兄弟の家族関係からいって、嫁もまた自分のふた親を看取らなければならない介護の責任者なのです。自分の親は誰かが見てくれるからどうでもよくて、夫の親だけをみられますというのが今までの嫁なのです。

ところが、今は兄弟が減っているし、サラリーマン化しているので、みんな親の生国（しょうごく）のそばにいるわけではないのです。東京にはあらゆる言葉のイントネーションの人が集まっています。これから大都市の高齢化対応が大変なのですが、故郷を離れ、こうし

て大都市にいますから、生国にいる子ども夫婦は1組ぐらいなのです。高校の同級生などと結婚すると、4人の親がいて、定年ぐらいまではいいけれども、子ども夫婦が60、70となるうちに親はいよいよ80、90となり、これもまた避けることのできないことで、同じ年頃だから同時に倒れる。その中で一体、子どもだけができるか。

とは言いながら、私は伝統の中を生きてきた昭和ひと桁ですから、一人娘に「あんたの世話にはならないよ」と言ったことは一度もありません。「精魂こめて命がけで育ててきたから、迷惑かもしれないけれども、きちんと最後は見送ってもらわなければ困る。それをやらないと言うのなら、私はさっさと住民票を移してこの家を出て、身分相応な有料老人ホームに移り、あんたと所帯を分離する。そうすると、今だったら優遇措置を受けられるはずの同居世帯の居住用住宅の8割控除の特典を受けられなくなるから」と脅したら、「どうぞ、ずっといてくれ」と言いました。

介護の仕方が悪いといけないから、さわやか福祉財団の堀田先生にお願いして、成年後見人として他人を1人ぐらいつけてもらおうと言ってあります。親も甘いことを言わないで自衛しなければ。先に死んでしまうこともあるし、半身麻痺になってしまうこともあります。無理にとは言いませんが、どんな時代になっても、自らに命を与えたものの最期を見届けるのは子の責任だろうと思っています。そのぐらいの責任は果たしてもらおう。しかし、だからといって、親の財産を取り上げてしまうのは経済的虐待です。この分野は堀田先生のところに駆け込んでいただきたいと思っています。

申し上げたかったことは、長寿文明の創造です。働くことを含めて今までこの世の中がおかしかったのは、人間の複雑な性格のわりに50年、60年という短い人生しか与えられなかったから、過ちを改めることも遅く、過ちを繰り返してきたのではないか。

今、世界の少なくとも先進国の人々が100年に近い長寿を普遍的に獲得するとき、私どもは、戦争の悲惨さと、ここからどのように立ち直り、そして次の世代がどのように生き生きと生きられるかを、長年の経験を通して若い世代と共有し、伝え合い、学び合う。そのような責務があります。

22世紀の歴史学者が過去を振り返ったとき、人類のかなりが普遍的に長寿を獲得した今ぐらいから人類は少しましな考えを持ち、長寿文明の創造に取り組むようになったといわれるような生き方を、わが高連協は真っ先に立ってしようではありませんか。

ご清聴ありがとうございました。

<略 歴>

評論家。高齢社会NGO連携協議会（高連協）共同代表。

高齢社会をよくする女性の会理事長。東京家政大学名誉教授。

時事通信等を経て、東京家政大学教授。元「女性と仕事の未来館」館長、「社会保障国民会議」委員。

著書に『親と子の距離を考える』、『他人が見える教育』、『祖母力』等。

NHK教養講座（4～6月放送）「人生100年女と男の花ごよみ」を終了したところ。